２　中尾遺跡１号竪穴建物出土鉄鉾・板状鉄斧・鋳造鉄斧に残る有機質痕跡とその意義

塚本 敏夫（公益財団法人元興寺文化財研究所）

１．はじめに

中尾遺跡は鳥取県倉吉市大谷に所在し、国府川の北側の低丘陵地に位置し、旧石器時代から古代まで継続した遺跡である。第３次調査で見つかった弥生時代中期後葉の１号竪穴建物（直径約 7.5 mの柱穴６基の円形建物）の焼失した梁や屋根材の下から舶載品と思われる鉄鉾・板状鉄斧・鋳造鉄斧の３点がほぼ完形の形で揃って出土した。また、特異な出土状況と焼失時に貴重な舶載鉄器を家屋から持ち出さなかったことから、焼失住居は失火ではなく住居を意図的に焼却する際の何らかの儀礼として鉄器３点が利用された可能性が指摘されている（片岡 2022）。

ここでは鉄鉾・板状鉄斧・鋳造鉄斧の出土状況や鉄器に残る有機質痕跡からその利用実態の解明とその意義について考えてみたい。

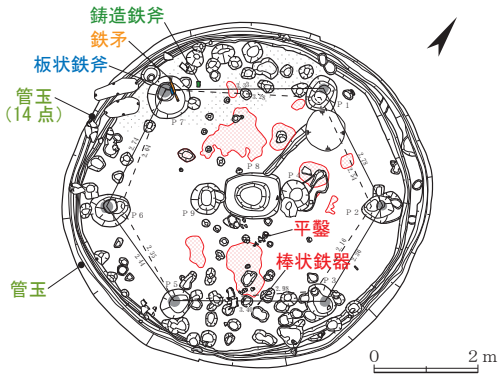
２．鉄鉾・板状鉄斧・鋳造鉄斧の出土状況とその評価

２－１　鉄鉾・板状鉄斧・鋳造鉄斧の出土状況

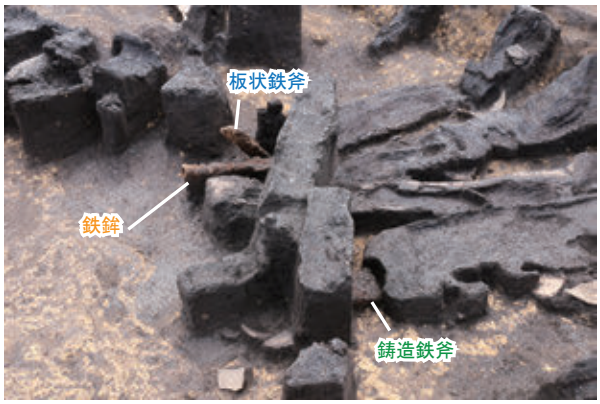
鉄鉾・板状鉄斧・鋳造鉄斧が出土したのは１号竪穴建物の６本の柱の、中心から見て北西の柱付近で、鉄鉾と板状鉄斧は柱の室内側に位置する。鉄鉾は横倒しになって出土しており、もとは柱近くに刃部を突き立てた状態であったと推定されている。板状鉄斧は刃部を上にして柱の根元付近に突き刺された状態で出土した。それに対して、鋳造鉄斧は北側に 50cm ほど離れた個所に床面から１cm 浮いた状態で、炭化材片の上から出土していた。このことから何らかの方法で梁材に固定されていた可能性が考えられる。いずれも焼け崩れた梁材や屋根材の下から出土しており、３点とも柄は確認できなかった。また、西に１m離れたところから管玉 18 点中 14 点がまとまって出土している。出土状況からは糸で繋がっていたとは考えにくく、ばらした状態で撒いたか、袋にばらけた状態で入っていたものを置いた可能性が考えられる。また、貴重なガラス玉も２点出土している。南東側からは棒状鉄器と平鑿が出土している。

２－２　出土状況からの評価

鉄鉾や板状鉄斧が柱の根元付近に突き立てられて出土した。突き立てて住居内に保管していたとは考えにくく、また、当時の最も貴重な最新の舶載品の鉄器類を火事の際に持ち出さなかったとは考えにくい。何らかの祭祀的な作法に基づいて最新の武器を含む利器を儀仗として柱近くの床面に突き立てたり、棟材に括りつけて家屋を燃



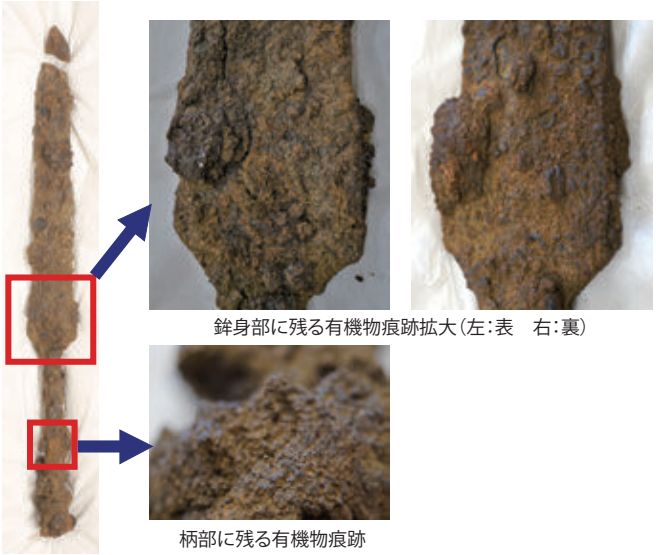
第 119 図　１号竪穴建物遺物出土状況図



第 120 図　１号竪穴建物鉄器出土状況

やしたと考えるのが妥当である。

弥生中期後半の貴重な舶載品と思われる鉄器類が完形で家屋の焼失行為に利用されたことの意義は大きく、このことは玉類の出土状況からも祭祀利用との考えは肯定されよう。



第 121 図　鉄鉾の有機質痕跡

３．出土鉄器の有機質痕跡

３－１　鉄鉾の有機質痕跡（第 121 図）

鉄鉾は出土後の調査で片面は土や錆をクリーニングしてしまっているが、反対側の面は未クリーニングの状態で保管されていた。クリーニングされてない面の表面を詳細に観察すると、表面に規則性のある粒々が確認できる。この粒々は先行研究から布の織目の名残と推定できる。したがって、何らかの布が鉄鉾の本体に巻かれていたことが推定される。また、写真やＸ線写真に幅４～５㎜の紐状の有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、錆瘤はこの紐の錆化した痕跡と推定できる。特に、鉾身の根本付近に幅３～４㎜の紐状の有機質がループ状になっている箇所が見て取れる。確定はできないがこの位置で紐を結んでいた可能性もあろう。また、この位置には少し太めの有機質（布か革かの同定は出来ない）の痕跡が確認でき、確定はできないが鞘口状の有機質であった可能性がある。

第 122 図　板状鉄斧の有機質痕跡

３－２　板状鉄斧の有機質痕跡（第 122 図）

板状鉄斧には布痕跡は確認できないが、写真やＸ線写真から明瞭ではないが紐状の有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、錆瘤はこの紐状の有機質の錆化した痕跡と推定できる。特に、基底部に密に有機質情報が確認できる。

３－３　鋳造鉄斧の有機質痕跡と内部納入品（第 123・124 図）

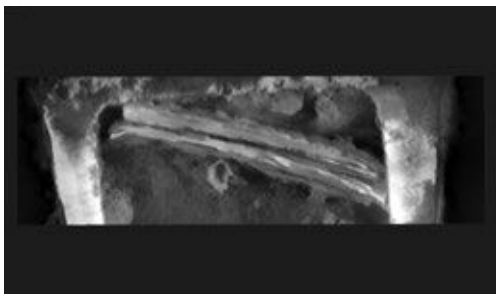
鋳造鉄斧にも布痕跡は確認できないが、写真やＸ線写真から明瞭ではないが有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、錆瘤はこの紐の錆化した痕跡と推定できる。特に、側面で顕著に有機質情報が確認できる。特筆すべきは、Ｘ線及びＸ線 CT 調査で、袋部の中に全長 52 ㎜と 56 ㎜の方形断面の棒状鉄製品が確認された。

第 123 図　鋳造鉄斧の有機質痕跡

４．出土鉄器の有機質痕跡の意義

出土鉄器の有機質痕跡に関しては日本海沿岸や瀬戸内地域では刀剣類の外装は弥生時代中期の抜身に布巻から弥生時代後期に入って木製鞘・柄が徐々に普及していくことが知られている（林 2020、ライアン 2020）。一方、近年、時代は下るが古墳時代中期以降の焼失住居や廃絶住居、祭祀遺跡や古代寺院や都城や官衙において、意図的に武器・武具や農工具を解体または装具を外して布や紐、藁縄等で巻いて住居や災害への鎮め目的の祭祀に利用している実態が明らかになってきた（塚本 2022）。

本例でも兵仗や利器としての装具（木製柄）を外して鉄器単体で、しかも有機質を巻いて本来の機能を封じ込め、儀仗や祭器として焼失住居の鎮め目的の祭祀に利用されたことが伺える。



第 124 図　鋳造鉄斧袋部内部の CT 画像

５．焼失住居や廃絶住居での鉄器武器や利器の祭祀利用の展開とその評価

弥生時代の焼失住居や廃絶住居での鉄製武器の祭祀利用に目を転じると、鉄鉾に関しては墳墓以外では完形品としては上田市上田原遺跡のＩ区第 40 号土壙出土品が知られているが住居跡ではなく、青谷上寺地遺跡の県道７区Ｈ層出土品（袋部破片）も包含層で、やはり住居ではない。管見では中尾遺跡１号竪穴建物出土の鉄鉾が初例である。

そこで、対象を鉄剣とし、地域も九州以東に広げると、弥生時代中期・後期にこのような作法が散見される。まず、信越地域では中期後葉の佐久市五里田遺跡の第１号住居跡出土の鉄剣片が布状繊維で螺旋状に巻き付けられた状態で床から２～３㎝浮いて出土している（塚本他 1999）。住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。後期では岡山市百間川原尾島遺跡の焼失住居である竪穴住居６から藁状の有機質で巻かれた[1] 鉄製短剣が炭化材の上から出土しており、明らかに焼失住居の片付けに伴う祭祀行為に利用されたことが伺われる。また、播磨町大中遺跡の 15 次１号住居のベッドの段下から浮いた状態で出土した鉄製短剣も革紐状の有機質で巻かれた痕跡があり（藤原編 2022）、住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。

次に鉄斧の状況を見てみよう。板状鉄斧では、中期後半の長野市春山Ｂ遺跡の焼失住居 SB01 から板状鉄斧[2] が太形蛤刃石斧とともに埋土中から出土しており、焼失住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。鋳造鉄斧では、中期後半の朝霞市向山遺跡のＣ－３区第６号住居から分析結果からも舶載品とされる、ほぼ完形の二条突帯鋳造鉄斧が北西側の柱穴付近の床面に欠損面を下にして、柱状片刃石斧と隣接して出土しており、有機質痕跡は無いが廃絶に伴う祭祀に利用した可能性が伺える。

これらの焼失住居や廃絶住居での鉄剣や鉄斧の作法は先行する中尾遺跡での作法と類似しており、今のところ中尾遺跡が列島での初例であり、３点全てが完形の舶載品の可能性が高く、当時最も価値の高い威信財的舶載鉄器が住居の廃絶行為に伴う祭祀に鎮物として利用されたと解釈するのが妥当であろう。その作法が時代とともに他地域へ少しずつその内容を変えながら伝播していっていることが看取できる。

６．おわりに

中尾遺跡１号竪穴建物での舶載鉄器を用いた焼失住居に伴うこの作法の実態とその意義が調査を通じて朧気ながら見えてきた。この発見の意義は大きく、今後の弥生時代以降の鉄器文化の受容と展開を考える際、重要なカギとなる事例である。しかし、まだまだ未解決の問題も山積している。最後に問題点を挙げて現段階での推論を提示して結びとしたい。

１．鉄鉾を柱穴付近の地面に突き刺す行為であるが、鉄鉾での類例は無いが、銅剣では今治市経田遺跡の ASK1 SP2872 での柱穴横に突き立てた銅剣片が上げられよう。その行為の真意は不明であるが地鎮の意味が込められていたのではと推論している。また、時代は下るがＵ字型鋤鍬先を廃絶住居跡の床に突き立てている事例は散見でき、今後事例を集めて再考すべき作法である。

２．板状鉄斧は鉄鉾とは逆に、刃を上側に向け根元を地面に突き刺して立てる作法であるが、板状鉄斧での類例は探し切れていない。時代は下るが９世紀中葉の市原市南大広遺跡では基壇中央から蕨手刀が、南西・南東の両隅から刀子が、切先を天に向けて出土した。同様に市原市萩の原遺跡の２号基壇中央でも大刀が切先を天に向

けて出土しており、地鎮のためではと推定されている（財団法人市原市文化財センター 1992)。今後事例を集めて再考すべき作法である。

３．出土状況から鋳造鉄斧は梁材に固定されていた可能性が推定された。管見では､類例は確認されておらず、その作法の意図も不明である。今後は民俗事例も含めて類例が集まった後に再考すべきである。

４．鋳造鉄斧の内部納入品の用途は不明である。ただ、一つの仮説として、袋部の規格と２本の棒状鉄製品の寸法から板状鉄斧を入れ子状態にした時の留金具ではなかったかと推定している[3)]。

５．この作法の系譜は今のところ舶載鉄器の使用から大陸に求められそうであるが、現時点では特定できておらず、その解明が今後の大きな課題である。

謝辞　小稿をなすにあたって、以下の機関および個人に遺物実見・実測の便宜を図っていただいた。記して感謝いたします。

伊都国歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、岡山県古代吉備文化財センター、兵庫県立考古博物館、岡本泰典、岡部裕俊、禰冝田佳男、藤原怜史、初村武寛、ライアン・ジョセフ

註

１）藁状の有機質を巻く事例は長岡京正殿跡出土小札（塚本・山田・初村 2010）他でも確認されている。

２）方形で袋状鉄斧の再加工品の可能性が指摘されている。有機質痕跡は未確認である。

３）青谷上寺地遺跡の県道７区Ｈ層から入れ子状態で出土した鋳造鉄斧と板状鉄斧のセットは鉄器の地中保管や埋納の状況との解釈が推定されている（野島 2011)。しかし、板状鉄斧は鋳造鉄斧と接しておらず、間に何らかの介在物が存在したと考えられている。青谷上寺地遺跡出土品では板状鉄斧の刃先を鋳造鉄斧の袋部に差し込む形態で出土しているが、中尾遺跡出土品は板状鉄斧の底部を袋部に差し込む形態で両端に刃部を持つ武器として機能させていた可能性を想定している。このような組み合わせで器物として存在していた可能性もあり、解釈の一つとして青谷上寺地遺跡出土品の先行品で、祭祀行為を行うに際して、外して別々に利用したのではないかと推定している。その際に留金具として鉄棒２本を袋部の中に入れた可能性も考えられよう。

脱稿後、斎野裕彦氏より富沢遺跡 99 次Ⅱ区 13 層下部（14 層の弥生前期水田跡上層）から樹皮巻石鏃？が出土していることをご教示いただいた。実見すると樹皮状有機質は全体に巻かれていたようで、器形から雛形の石剣か石鉾と考えられる。水田の廃絶に伴う儀礼に金属製の代替品として使用された可能性が高く、その作法の出自が注目される。

引用・参考文献

財団法人市原市文化財センター 1992「4．南大広遺跡（Ｂ地区)」『第７回　市原市文化財センター　遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター pp. 14-15

江原　順編 2022『台の城山遺跡と向山遺跡－弥生の斧を手に入れたムラ－』朝霞市博物館

片岡啓介 2022「中尾遺跡」『発掘された日本列島 2022　調査研究最前線』文化庁　pp. 37-39

塚本敏夫 2022「儀仗としての武器・武具」『古代武器研究 vol. 17』古代武器研究会　pp. 35-57

塚本敏夫・菅井裕子・平尾良光・鈴木浩子・大沢正己 1999「付編３　鳴滝遺跡群五里田遺跡出土金属資料の自然科学的分析」『鳴滝遺跡群五里田遺跡－長野県佐久市根々井五里田遺跡発掘調査報告書－』佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 74 集　佐久市教育委員会　pp. 138-161

塚本敏夫・山田卓司・初村武寛 2012「長岡京出土小札の再検討」『都城』23　（財）向日市埋蔵文化財センター　pp. 71-86

照林敏郎 1997「朝霞市向山遺跡の調査－弥生～古墳時代前期－」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第４回鉄器文化研究集会　鉄器文化研究会・朝霞市教育委員会　pp. 2-22

野島　永 2011「第３節　弥生時代鋳造鉄斧の形態変化と破片利用」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告６　金属器』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 39　鳥取県埋蔵文化財センター　pp. 92-106

林　大智 2020「日本海沿岸地域おける鉄製武器の普及と防御集落」『古代武器研究 vol. 16』古代武器研究会　pp. 25-51

藤原怜史編 2022『弥生集落転生』兵庫県立考古博物館

ライアン・ジョセフ 2022「中四国・畿内における鉄製刀剣の普及」『古代武器研究 vol. 17』古代武器研究会　pp. 53-70

尚、紙幅の関係上遺跡文献は割愛させていただいた。